令和３年度　学校経営計画・自己評価書

足立区立古千谷小学校
校長　清澤　和人

１　学校教育目標

人間尊重の精神を基調に、自他の生命を尊び、豊かな知性と感性を備えるとともに、国際感覚をもった心身ともにたくましい、人間性豊かな児童の育成を目指し、次の目標を設定する。　○　よく考え がんばる子　○ 明るく思いやりのある子　○ 強い体で 元気な子

２　めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	「子ども・教師・保護者・地域が共に学び合い育ち合う学校」 ○子どもにとって学びがいのある学校 ○教師にとって働きがいのある学校 ○保護者・地域にとって誇りにできる学校
○児童・生徒像	○自分の成長を実感し、生涯学び続けようとする子ども ○自他の違いを多様性として認め、それを「よさ」として活かしていこうとする子ども ○人や社会のために役立つ働きをし、自らよりよい関係性や社会を作ろうとする子ども
○教師像	○授業の質を高め、常に学び続ける教師。 ○子どもの「よさ」を積極的に見出し伸ばしていこうとする教師。 ○保護者・地域と共によりよい学校づくりを目指す教師。

３　学校の現状及び前年度の成果と課題

・「足立区コミュニティスクール」として「地域協働」を主な経営理念において取り組み、教職員と保護者・地域住民との連携も円滑になった。
・新型コロナ対策のため教育活動が制限される中、カリキュラムの調整を行い、主要教科については年度内に計画した内容をほぼ指導することができた。
・今後の社会情勢の変化に柔軟に対応できるカリキュラムの編成を行い、次代に生きる学力を保証するための取組を進める。

＜授業改善・学力向上＞

- 家庭学習は、70%以上の児童が毎日行うことができている。家庭学習に取り組めていない児童が 8～10%程度。保護者との連携強化が必要。
- 日常の読書習慣については平均すると 70%以上の児童が意欲的に取り組めるが、学級によってばらつきがみられる。指導の徹底を進めることが必要。
- 放課後補習教室、MIM 補習等の実施によって、80%程度の児童は基礎的な知識・技能はおおむね定着しているが、個別的に支援が必要な児童も多くいる。全校で引き続き、基礎的な学力の定着について取組を進める。
- 授業力の向上については、後期から開始した小グループによる研修を 5 回行い、充実した研修ができた。研修内容を充実させ、レベルを高めていく。
- ICT 活用については学力定着の推進および ICT 活用能力の向上を目指して、授業および家庭学習での ICT のう効果的な活用を進める。
- **＜体力向上＞**
- 日常的な運動の意欲については 70～80%の児童が高まっている。投力向上の取組として「リングビー」を導入し、投げ方指導に成果を上げている。
- 自己肯定感、有用感については、児童自身がそれを自己認識することが難しいようである。様々な場面を設定して児童の「よさ」を自認できるよう働きかける。

＜幼保小・小中連携＞

- 小中連携については、学習規律や学習環境の共通理解、生活指導の共通理解を進める取組をした。ユニバーサルデザインに基づく授業を進めていくこと、学習規律を共有していくこと等について成果があった。今後も取組を進めていく。
- 幼保連携については、コロナ禍もあり、児童・園児相互の交流はなかったが、職員交流による情報共有を進めた。

4　重点的な取組事項

	内　　容	実施期間（年度）　R:令和				
		R1	R2	R3	R4	R5
1	学力向上アクションプラン	○	○	○	○	○
2	体力向上・健全育成	○	○	○	○	○
3	幼保小・小中連携	○	○	○	○	○

5　令和３年度の重点目標

重点的な取組事項－１	学力向上アクションプラン

Ａ　今年度の成果目標	達成基準（目標通過率）	実施結果（通過率結果）	コメント・課題	達成度 ◎○△●
確かな基礎学力の定着と活用力の向上	学校平均通過率 80%を超える	82.8%（国 81.3、算 84.2）	目標「80%を超える」を達成できた。 国語読解力については課題が残る。	○

Ｂ 目標実現に向けた取組み

新・継	アクションプラン	対象教科 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取り組み内容 （誰が、何を、どのように）	達成確認方法	達成目標 （＝数値） （いつ・何を・どの程度）	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
1 継続	読書の推進	全学年	朝読書 火・金 および 日常的 な読書	【指導者体制】担任 【取り組みのねらい・目的】読書習慣の日常化、長文読みの耐性を育成する。 【使用教材】学年課題図書を中心にした児童図書	読書マラソンカード 学校図書館の活用状況	一か月に二冊以上の読書をする児童が 80% または１００日 ２０００分読書達成 ７０％	朝読書の実施で、日常的な読書習慣はおおむね定着している。 ・100 日、2000 分達成は２～６年生で 50～７０％の間でばらつきがある。 ・一か月に２冊以上本を読む児童は平均して８２％	・学級によって読書意欲にばらつきがある。全校共通の指導として徹底していく。 ・読書マラソンおよび朝読書を通して文章の読み取りを向上させていく。	△

2 継続	放課後補習教室	全学年 国語 算数 正答率 70%未満	毎週金 放課後 40 分	【指導者体制】担任＋専科サポート４名+学習ボランティア１名＋特支教室教員２名 【取り組みのねらい・目的】課題別取り出しとその他の指導に分別。特に論理的な読みの力および記述力を高める演習を中心に個に応じた指導を進める。 【使用教材】ベーシックドリル、区学力調査問題 １年生はMIM補習を行う。	確認テスト 実施	２月までに実施する定着度確認テストで目標値を通過する対象児童 90%	・令和３年度区学力調査問題の再実施の結果、学校平均で国語 81.3%、算数 84.2%の通過率。	・文章理解について課題がある。必要な情報の読み取りについて工夫していく。	○
3 継続	家庭学習の取り組みの改善	全学年 全員	毎日	【取り組みのねらい・目的】家庭学習習慣の定着。 【使用教材】漢字ドリル・計算ドリル e ライブラリ等のデジタル教材	読書マラソン 漢字・計算、自主学習 e ライブラリの活用状況	毎日の宿題提出率 100%	家庭学習の習慣定着した児童 80%～90%	家庭学習の習慣はおおむね定着していると判断するが、10%程度の児童は個別の特性の問題や家庭のサポートの問題等の課題がある。	○
4 継続	授業改善	全教員	年間を通して	・主幹・主任教諭をリーダーとした４グループごとに毎月１回の相互授業公開・検討を行う。 ・論理的な読みの練習を授業内で定期的に行い、読み取りの力を育てる。	管理職に提出される実施報告による検証	１０月～３月まで毎月１回実施達成確認。	年間１０回各グループでの相互授業観察・評価ができた。	指導方法の工夫について意識が高まった。文章理解について重点を置いた授業構成を工夫する。	○
5 継続	ICT 活用	全学年 全員	通年	【取り組みのねらい・目的】各教科でデジタルコンテンツの活用によって「学習意欲の向上」および「集団的思考の推進」をめざす。	・アンケート調査 ・児童作品等の分析	アンケートの「学習意欲」に関する項目で肯定的な回答 ８０% 学習感想や学習成果物の充実度合い	ICT 活用の学習について８０%以上の児童が楽しいと答えた。グループ学習については機会が減ったことで、意識が下がった。	児童は ICT 活用に関して積極的で、学習意欲も高まっていた。但し今年度はグループで「調べて発表する」活動が困難だったため、個々の活動で差があった。	○

重点的な取組事項－２	体力向上・健全育成

Ａ　今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
自他の生命尊重の観点に立った自尊感情・人権感覚をもち、健康で安全な生活を実践できる子の育成	・自尊感情・自己有用感についての児童の自己評価、保護者評価、学校関係者評価での肯定的な評価が８０％以上 ・体力向上の意識について、児童の自己評価、保護者評価、学校関係者評価での肯定的な評価が８０％以上	・自己肯定感については約 55%が自分を肯定的に意識している。 ・日常的な運動を積極的に行う児童が約 70%いる。	・児童は、自己肯定感、有用感を自覚することが難しいようであるが、様々な場面で認める働きかけを行っていく。	○

Ｂ 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
自尊感情･自己有用感の向上	児童自己評価で８０％以上	・Ｑ-ｕによる分析・評価で適切な支援を工夫する。 ・全校ＳＳＴによる学級集団の質的向上を図る。 ・縦割り班活動を毎月行う。 ・児童の活動成果を朝会等で紹介し意識を高める。	・Q-u の活用については、各学級の結果を学年で分析し、支援策を検討している。 ・全校 SST は毎月実施している。 ・縦割り班活動や特別支援学級の交流活動は十分にはできなかった。	今後も Q-u を適切に活用して学級集団での児童の満足度を充実させる。	○
日常的な体力向上	日常的に運動を積極的に行う児童が８０％	・「なわとび」「持久走」「サーキットトレーニング」などを体育時に実施。 ・「リングビー」を取り入れ投力向上を図る。 ・学級での全員遊びなどを積極的に取り組む。	・新型コロナ対応のため、活動内容を制限して実施した。 ・「リングビー」を授業に取り入れて行った。児童の投げ方への意欲が高まった。	今後も状況に応じた運動内容を工夫しながら体力向上の取組をする。	○
体育･保健学習の充実	・児童の授業評価で肯定的な評価８０％	・投力を高める運動を毎時間の学習過程に組み込む。 ・オリンピック・パラリンピックへの意識を持たせる学習の工夫。 ・保健指導年間計画に基づいた指導の適切な実施。	・オリンピック・パラリンピックについては体育の学習を中心に随時取り組んだ。 ・保健学習も年間計画に基づいて適切に指導できた。	・投力についてはさらに効果的な教材の工夫をする。 ・オリンピック・パラリンピックおよび保健学習については引き続き取り組む。	○

重点的な取組事項－３	幼保小・小中連携

Ａ　今年度の成果目標	達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
幼稚園・保育園、および中学校の教職員および児童・生徒との交流を通した円滑な連携	・幼保連携で年間２回の情報交換会実施 ・小中連携授業研究会を４回実施	前期では新型コロナ対応のため児童・生徒の直接交流は未実施、幼保との職員交流もできなかった。中学との授業研究は年間４回実施できた。	今年度できなかったことを踏まえて次年度へ取組を工夫して行えるようにする。	△

Ｂ　目標実現に向けた取組み

項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
教科指導を通した小中連携	・年間６回の連携研究会 ・教科ごとの研究分科会による授業研究の実施	・各教科部会で年間 4 回の授業研究を設定し、指導案検討会、研究協議会で連携授業について検討を行い、円滑な連結をめあてに検討する。	・年間４回の授業研究会が実施できた。 ・ICT 活用でリモートを使っての指導案検討や情報交換が進んだ。	共通テーマに基づいた授業の検討・実施によって、小学校・中学校の授業スタイルの共有化と校種の特性に応じた授業の工夫を相互に学ぶことができた。	○
学習習慣と健康指導を通した幼保小連携	・活動テーマを通して年間２回以上の職員交流と園児・児童の交流	・読書習慣および「読み」の指導の充実について連携。 ・歯の健康についての取組の交流 ・給食交流や学習交流	・読書習慣定着については各校・園とも取組は良好である。 ・歯の健康については治癒率 65%で昨年度と同じ。 ・給食などの交流はできなかった。	日常的な読みの習慣化についてさらに工夫が必要。	○

６　まとめ

（１）今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

ア　学力向上アクションプランについて

【課題】

・４年生国語では、通過率が 76.2 で区平均より９ポイント低く学習の定着状況に課題がある。「目的に応じて文章の内容を的確に押さえる」、「場面の状況を基に登場人物の心情を押えることができる」の領域における正答率が低い。

・上記以外では、どの学年も区平均に近い通過率だった。但し５年生国語では、区平均値より７ポイントほど低くなっている。目標値に達していない児童では「無回答」の問題が多く見られた。また、説明的文章・文学的文章の読み取りの問題の（Ａ―Ｄ）層の学力差が大きいので、問題文や問題の意図を把握するための手立てが必要である。

【対策】

・４年生国語の課題に対しては、読書時間の十分な確保を行って、文章理解に重点をおいた指導をしていく。また、国語の授業時間でも、短い文章を提示して内容理解を確認する場面を毎時間とるようにする。さらに、物語文の学習では登場人物の心情を図式化したりグラフ化したりする工夫を取り入れて、理解を深める指導をしていく。

・５年生国語では文章の要約を重視し焦点化して文意を書き表す活動を重ねる。さらに補習で短文の読み取りを繰り返し練習し習熟させる。

イ　体力向上・健全育成について

・投力については都の調査結果から、どの学年も都平均より１ポイント程度低い。特に「ボール投げ」「長座体前屈」「立ち幅ちび」に課題が見られる。体ほぐしの運動や「リングビー」を使った運動などを工夫して毎時間取り入れていくなどの工夫が必要である。

・Q-u アンケートを活用した円滑な学級集団の構成については、全校 SST の取組や各学級の Q-u 分析による対応策の実施で、一定の成果が見られた。今後も一層の効果的な活用を目指した取り組みを進めていく。

ウ　小中連携・幼保連携について

・児童の直接交流については実施できなかったが、教職員の交流については授業研究や共通の取組事項について連携を進め、一定の成果を見た。今後も状況に応じた連携の取組を工夫しながら進めていく。

（２）保護者や地域へのメッセージ

・足立区コミュニティ―スクールとして一層の地域連携を進めていくため、様々な学習機会を模索していきます。そのため、ぜひ地域人材や地域の教育的な取組を行う関係諸機関にご協力をお願いします。また、保護者の積極的な学習参画を進めていきたいので、ご協力をお願いします。

（３）その他（学校教育活動全般について）

・地域協創をキーワードに、状況の変化に柔軟に対応した効果的な学校教育を進めていく。さらに学校の施設・設備や教育環境を一層活用するとともに、地域の教育資源を見出して活用する取り組みを進める。Society5.0 に対応できる人材育成の場として、また、地域の学びの場としての学校づくりを進めて取り組んでいく。